

故郷の命を一緒に守ろう

仲間と磨く救命の技



フライトドクターの川嶋秀治さん。和歌山の空を飛び、救命の技を磨き続ける＝県立医大で

フライトドクター

川嶋秀治さん

命を救うため医師がヘリコプターで急行して治療を始める「ドクターヘリ」。県立医大は2003年に全国の国公立大で初めてこれを導入し、県内各地から30分以内で病院に運べるようになった。

フライトドクターの川嶋秀治さん(和歌山市出身)は医大を卒業して13年目。実家は建築会社で兄は道に進んだ。自分は建築を学んで会社を継ごうかと思っていたが、高2の時に父から「自分のやりたいことをすればいいよ」と言われた。

やりたいことって何だろう？ 将来の仕事思い描いている時、救急医療の現場で奮闘する医師の姿をテレビで見た。全力で命を救う仕事を知り「あんな人になりたい」と医学部を志した。

当時、和歌山医大は関西で初めてドクターヘリを飛ばし、これまで救えなかった命

を助ける試みを始めていた。事故などの外傷が半数を占めるが、お年寄りが脳卒中や心筋梗塞で倒れる事例も増えている。山間部では近くの診療所に救急車を走らせるだけで30分はかかる。川嶋さんは看護師とヘリに乗り込んで着陸し、現場で待つ救急車の中でベストの治療を探る。心肺が停止していれば1分でも早い手当てが脳の後遺症を防ぐ。時間との闘いだ。「その人の人生が僕らの手にかかっている。だから最善の方法を学び続けたい」

和歌山医大には脳や心臓の専門医がいる。多様なプロフェッショナルとチームを組んで危機と向き合い、知恵を集めて命を救う。そんな実践を積み重ねて救命の技を磨いていけるのは、和歌山医大の強みといえる。ここは救急医療の先進地なのだ。「この記事を読んで救急医になつてくれる人がいたらすごうれい」と川嶋さん。故郷の医療を支える仲間を求めている。

公立大近畿初 薬学部を来春新設

来年4月に開設予定の薬学部への期待は大きい。公立大では近畿初の薬学部となり、医学部・保健看護学部と合わせてチーム医療の研究体制が組めるのも強みだ。

薬剤師の世界でも高齢化が進む。紀南や橋本などでは現役の薬剤師が少なくなり、薬局の後継者がおらず閉鎖する事態が相次ぐ。地域で担う役割も多様化する。調剤した薬を渡すだけでなく、服薬指導や健康相談もできる薬剤師を育てることがミッションだ。薬学部長に就任予定の太田茂・県立医大教授は「薬剤師が病院や薬局の外に出て健康作りの一翼を担う取り組みは、日本の中でも今後発展させる必要がある。故郷を舞台に研究を深め、世界に向けて発信してほしい」と語る。

和歌山城北側の旧伏虎中学校跡地にキャンパスを建設中。医学部と付属病院がある紀三井寺にも3学部が共同研究できる施設を整備している。修学年限は6年。定員100人のうちに県内推薦枠を15人設け、県内のニーズに応じていく方針だ。

薬局の外にも活躍する舞台を



和歌山県立医大薬学部の完成イメージ図

県立医大卒業生から中高生へ